

アピセラピー アピモンディア 6 番目の機能

Mihaera Serban

養蜂は人間の歴史のごく初期から生活に取り入れられた。やがて芸術に、さらに科学の対象ともなり、我々に多くの恵みをもたらしている。今日ミツバチ生産物の収穫技術は大変洗練されているが、その原料は昔と変わらぬ、天然の花蜜、花粉、水などである。

ハチミツ、蜂ろうなど、ミツバチが作る物としてよく知られたものに加え、人間はミツバチをよく観察し、重要なミツバチ生産物をさらに発見した。ローヤルゼリー、蜂毒、そしてプロポリスである。ミツバチが植物の芽の浸出液を集め、巣に持ち込み、何らかの加工をしたものがプロポリスで、その詳細な仕組みはまだ不明な部分もある。

ミツバチ生産物が人間の暮らしにどんなに際だった効用を持つかは広く知られている。近代科学の進歩はミツバチ生産物の加工技術を向上させ、より効率の良い、効果的な利用が可能となった。

アピセラピーとはミツバチ生産物（巣箱からそのまま収穫したもの、および加工したもの）を人の健康、食品、化粧品に利用する科学である。その起源は養蜂と同じほど昔に遡ることができるが、近代にはやや見逃されていた分野と言えよう。しかし現在急速に発展しており、たとえば最近の日本における高レベルのプロポリス加工技術は、ユニークで洗練された、人体の特定器官を対象にする特殊な効能のプロポリス製品を生み出している。

アピモンディアの組織

約 100 年前の 1896 年に経済的、科学的、教育的など多様な面での養蜂の発展をめざす世界

の養蜂家が国際組織を結成した。1949 年にアピモンディアと名付けられたこの組織には現在世界各地の養蜂関係団体が所属し、理事会、国際養蜂会議、常置委員会の 3 つの主な運営組織がある。

常置委員会はそれぞれ担当する養蜂関連分野における問題を研究し、アピモンディアのめざす理念を実現することを目的とし、2 年ごとに開かれる国際養蜂会議に向けて報告書を提出する。アピモンディア憲章により以下の 7 つの常置委員会が制定されている： 1. 養蜂経済委員会、2. ミツバチ生物学委員会、3. ミツバチ病害敵委員会、4. 養蜂植物と花粉媒介委員会、5. 養蜂技術と蜂具委員会、6. アピセラピー委員会、7. 開発途上国養蜂委員会

理事会は他に作業部会を設置し、特定分野の活動を促進できる。

アピモンディアにおけるアピセラピー

アピモンディアは今日第 6 番目の常置委員会としてアピセラピー委員会を設置し、養蜂家の経済的、倫理的関心の対象としてアピセラピーを奨励している。しかしここに至るまでには長い道のりがあった。

アピモンディアの初期には、加盟する医薬関係方面の強い抵抗があった。彼らが養蜂会議に毎回多数出席することもあって、養蜂に関心を持つ医療関係者が「ミツバチ生産物は人間の健康に役立つ」と考えたとしても、「非科学的な意見だ、あやしい魔術だ」と同僚からつまはじきにされては困ると口をつぐむようなことも多くあり、組織としてアピセラピーを認める方向には行きにくいものがあった。

しかし養蜂家ならだれでも経験的に知っている、アピセラピーの健全な効果が（経済的利点を抜きにして）次第に会員間に理解され、アピセラピーをアピモンディア活動に取り入れても良いとの方向が示されるようになった。

1969年ミュンヘンでの国際養蜂会議の大会決議に、「会員は次回大会までにミツバチ生産物と人間の健康の関係を考える」との言及が加えられたのが、最初の公式記録である。1971年モスクワ大会の展示会にはロシアとルーマニアから多数のミツバチ生産物利用の健康関連製品が出品され、関連技術も展示されたが、それら製品の効果の医学的裏付けは、その時点ではまだ不十分であった。

1965年ルーマニア、ブカレストの大会で、アピモンディア会長に新たに就任したルーマニアのハルナジ氏指導の下、アピセラピー関係の文献をすべてブカレストの国際養蜂経済技術研究所（IITEA）に集めることになった。ハルナジ氏は1972年設立の、彼が指導するIITEAで研究を進め、多くの科学的データを得ることが、アピセラピー認知に向けての良い方策だと考えた。彼の決断がアピセラピーの正式認知につながったと大変感謝している。

ブカレストポリテクニク校の水力学教授であったハルナジ氏は1988年までの23年間アピモンディア会長職にあり、組織作り、その運営、細かなアピモンディア関連活動の調整などに腕を振るった。その間アピモンディアは大いに発展し、世界に広く認められる組織となった。

オーストラリア、アデレードの大会（1977年）ではハチミツも世界保健機関（WHO）の定める「人間の食品に関する国際基準」に加わることが議決された。アピセラピーの立場からはハチミツのみならずすべてのミツバチ生産物が同基準に加わり、国際的に正式に認知されることが、健全な国際商取引にも不可欠であろう。

ギリシャのアテネで開かれた1979年大会の大会決議は先進国の過剰な農薬使用が、地域の養蜂と関連産業に危険な影響を与えていることに対する強い抗議が声明に盛り込まれた。“ミツバチが花粉媒介をしてこそ健全な農業が行わ

れる。それ故にミツバチとその生産物は、関連するすべての国家において充分保護されるべきである”というのが我々の主張である。

1981年のメキシコ、アカプルコ大会でアピセラピー作業部会が設置され、続く83年ブダペスト大会において、アピモンディア第6番目の常置委員会への昇格も決まり、アピセラピーの利用、研究と発展のための活動が陽の目を見ることになった。

1985年、アジアで初めて開催された名古屋大会では、IITEAのアピセラピー部門が生産する製品に対するルーマニア健康省の正式認可を得るため、必要な準備を進めること、IITEAはルーマニア老人医学研究所と研究協力を行うこと、さらにアピセラピー製品の製造はその品質管理と記録情報の報告を正しく行える、認定企業だけに認めるべきであるとの方針が示された。その後の発展を経て、スイス・ローザンヌの大会（1995年）では、特にアピセラピーで使われることが多い、単一蜜源ハチミツの分析、認定方法に世界共通の基準を設けること、またアメリカアピセラピー協会（AAS、アメリカでは主にハチ毒による健康増進に関心が集まっている）や世界保健機関（WHO）との協力の下で現代的なアピセラピーの振興、普及をめざすことが提言された。

1997年にはアピモンディアの創立百周年記念大会がベルギーのアントワープで開かれたが、この決議にも前回と同様の内容が盛り込まれている。

現在の動き

近年の養蜂会議では、信頼しうる立場の医療関係者によるアピセラピー関連の発表が増えていく。アピモンディアで発表することで、彼らの研究はよりいっそう世界に広く知られ、信頼されるものとなりうる。これにより世界各地のさらに多くの医療関係者が、アピセラピーを研究し自身の医療にとりいれるようになった。

開発途上国では人々の環境をより清潔なものにして、生活レベルを向上させようとの潮流があり、高価な先進的医薬品の代わりに、代替医

表1 アピモンディア主催のアピセラピー関連セミナー

開催年	テーマなど	開催地
1971 年	「ミツバチ生産物の化学」	ブラチスラバ (チェコスロバキア)
1971 年	「アピセラピー」	モスクワ (ソ連)
1974 年	「ミツバチ生産物－健康, 食品, 美容」	マドリッド (スペイン)
1976 年	「アピセラピーの進歩」 IITEA から特別版 “アピセラピーニュース” が出版され, 好評だった	ブカレスト (ルーマニア)
1977 年	「ミツバチ生産物の化学」	ボローニャ (イタリア)
1977 年	UNCTAD との共催によるセミナー; この間, スロベニア養蜂家協会と協力しポルトロソ (スロベニア) で多様な複数の アピセラピー関連セミナーを開催	ジュネーブ (スイス)
1983 年	「アピセラピー」	ハツリア (イスラエル)
1997 年	「代替治療法」 (アピセラピーを含む)	テルアビブ (イスラエル)

療としてのアピセラピーが認識されるようになった。持続可能な健康増進手段として、開発途上地域での今後の伸展が期待される。

現在のアピセラピー常置委員会は AAS 会長でもあるシュルブリエ氏を委員長に、ルーマニアのマテスク女史を副委員長に迎え、活発に活動している。アピセラピー関係の重要な研究、幅広い普及が見られる国はキューバ、中国、ブラジル、ロシア、日本、ニュージーランド、スロベニア、ルーマニアである。

国際科学セミナーの開催

国際養蜂会議での討議や決議文作成の他に、アピモンディアはアピセラピー普及のために表 1 に示すセミナーを開催し、IITEA から下記の書籍 (公用 5 か国語に翻訳) を刊行してきた。
「花粉とその利用」 Emil Caillas 著 (1959)
「プロポリスとその利用」 V. Harnaj 編 (1978)
「ハチミツの味」 (ハチミツの化学分析) Vache and Gonnet 共著 (1989)

まとめ

養蜂とその生産物加工に携わるすべての人は、自分の扱うミツバチ生産物が、ミツバチが作ったままの原材料であれ、高度に加工処理されたアピセラピー関連製品であれ、消費者の手に渡るまでの間、できる限り清潔で自然のままに、また、決して途中の行程で汚染されないよう、細心の注意を払う基本的義務がある。

またアピモンディアはこれまで努力を続けて

きたが、未だに世界のすべての養蜂家に充分手を差し伸べたとは言えない。アピモンディアの活動や業績をまだ知らない多くの国、養蜂家、関係企業の人々がいる。彼らとの交流が始まれば、アピモンディアが持つ多くの有用な情報を提供でき、また彼らからも大きな寄与を受けることになる。

実際、アピモンディア事務局に長くいたにもかかわらず、私はごく最近まで日本でこのようにミツバチ生産物の研究と、製品産業が多彩に発展していることを知らなかった。アピモンディア、日本双方に至らない点があったのであろう。今それぞれが少しずつ努力をすれば、相互に大きな利益となる協力関係を手に入れられると私は確信している。

本稿はプロポリス研究者協会主催の講演 (1998 年 11 月 14 日) をまとめたものである。

(翻訳: 榎本ひとみ)

MIHAELA SERBAN. Apitherapy-The 6th function of the Apimondia organization. *Honeybee Science* (1999) 20(2): 64-66. International Beekeeping Technology and Economy Institute of API-MONDIA, 42 Ficusului Blvd., Bucharest I, Romania

The Apitherapy is the science of using the bee products for human health, food and cosmetics. The paper presents the history and the activity of the 6th Apimondia Standing Commission, dedicated since its creation in 1983 to the development, research and use of Apitherapy.